円卓無双

康頼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
円卓無双

【Ｎコード】
Ｎ０９６６ＢＡ

【作者名】
康頼

【あらすじ】
終焉の地を訪れた円卓最強の騎士ランスロット。
自らの行いの果ての結末を見て彼は何を思う。

prologue

そこは地獄のような風景だった。
ほんの数日まで、野花で溢れかえっていたキャムランの丘は血という赤い絨毯に覆われ、白銀の鎧を纏う残骸からは死臭が漂い始めていた。

何故、このようなことに……

目の前の惨劇に吐き気を催しながら、ゆっくりと丘の頂きへと歩き始める。
鉄の匂いが鼻に充満し、時々血だまりに足を取られそうになるが、それでも歩き続けた。

足が取られ、思わず足元を覗いてみるとそこには同僚だった騎士の亡き骸あった。
彼は、頭を裂かれた傷で絶命しており、その姿は誇りある騎士そのものだった。

それに比べて自分の無様さには笑うしかない。
いや、そもそも私には笑う資格など無いのだ。

私が親友であり好敵手でもあった『太陽の騎士(ガウェイン)』を打ち取らなければこんなことにはならなかっただろう。

私が誇りに思い忠義を誓った王に手傷を負わさなければ、王は死ぬことはなかっただろう。

私が裏切りなどしなければこのような結末は迎えなかっただろう。

私がいなければ、彼女が悲しむことはなかっただろう。
屍の道を踏み越えて、丘の頂きに辿りつく。
ここがこの戦いの終着点、王とその息子が死闘を演じた場所である。
足元には、絶望に歪んだ表情で朽ちた男の姿だった。

この男に抱く感情は複雑だ。
この男とアグラヴェインの企みにより、私の不義が暴露された。
そのことに関して怒りを感じてしまうことがあったが、今となっては憐れでしかない。
王を裏切ったことに関しても、私だけは批判をすることができない。

一人の結末を確認した足は再び丘を下り始めて、もう一つの結末を確認に向かう。
馬の背に跨り、最後にもう一度だけ丘の方に視線を向ける。

これが自らの罪だ。

背負うべき罪を目に焼き付けて、馬を走らせていく。

駆け抜ける自分の周りには誰もいない。

常に我々の先頭を走り続けた王も、隣で豪快に笑うガウェインも、その姿を見て静かに笑みを零すトリスタンも、自分とガウェインの後を追うことに必死だったガレスとガヘリスも、その光景を見て頬を釣り上げるケイも…
全てこの世界からいなくなってしまった。

木々の隙間を縫うように走らせて向かった先は子供の頃、よく駆け回った森である。
ここが終焉の場所である。

馬から飛び降り、ゆっくりと歩き出す。

見慣れた懐かしい景色を見て思いだすのは幼少期、誇り高き騎士に憧れて腕を磨き続けた自分の姿である。
湖の精、ヴィヴィアンの元で完璧なる騎士に育てられた私は、今では全てを裏切った不義の騎士である。

懐かしい記憶に囚われつつも、歩みは何かに導かれるように進み、そして辿りついた。

樹齢数百年の大樹の幹の傍に、小さく土が盛られた傍に剣が突き刺さっていた。

それだけで、理解した。
ここが王が終焉した場所なのだと。

気付いた時には自分は両膝をつき、泪を流していた。
認めたくなかった。
私とは違い、完璧だった王が死んでしまったということに。
共に戦場を駆け抜けることができないことに。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

どれほどの時間が経っただろうか、背後に気配を感じ、思わず振り返る。

そこには憤怒の表情を貼り付けた忠義の騎士がいた。
隻腕から繰り出される槍捌きに、思わず身体は反応し、側面に飛び転がりながらも、愛剣アロンダイトに手を掛ける。

「ベディヴィア……」

「裏切り者の貴方が何の用です」

氷河のような冷たい殺意に、背筋を凍らせる。
彼が私に殺意を向けるのは当たり前だった。
私の裏切りから祖国は分かれ、戦いが起こり、多くの騎士と、同僚の円卓の騎士を失ったのだから。

茫然と彼を見るしかなかった私を見て、ベディヴィアの表情は怒りを露わす。

「何故、剣を抜かないのです？　それとも私ごとき相手をするのに剣はいらないと？」

流石は円卓の騎士筆頭です。と吐き捨てるベディヴィアに対し、私は剣を抜くことはできない。
私はもう仲間を斬りたくないのだ。

ガレスとガヘリス、ガウェインを殺めて、王に致命傷を与えた感触を思い出すと吐き気と悲しみしか思いださない。

だが抜かなければ間違い無く私は死ぬだろう。
確かに私と刃を交えて互角に戦えたのは、王とガウェインとトリスタンくらいである。
しかし、それは目の前にいるベディヴィアが弱いというわけではない。

戦場を共にかけた時に見せた彼の槍捌きは、驚嘆に値するもので、疾さでは円卓の騎士随一かもしれない。

「ならその飾りを抜いて差し上げましょう」

獣のような荒々しさから放たれた精錬された刺突の数は、六。
人の身で回避できるものではない。

横に逃げるように跳び、回避できない突きは左手で受け止める。
鋼でできた籠手を貫き、血肉を切り裂いた突きを右手で掴む。
そのまま奪い取ろうと右手に力を加えるが、距離を詰めていたベディヴィアの蹴りにより阻止された。

「甘い」

「ぐっ」

瞬時に槍を離し、ベディヴィアの蹴りを受け止めると、そのまま後方に飛ぶ。
そのまま宙に浮いた私に向かって、ベディヴィア右手に持った槍を矢のように投げ飛ばす。

飛来する槍に対し、私ができることはアロンダイトを抜くことだけ

だった。
鞘から刃を抜き去ると同時に、槍を弾き返すと刃先をベディヴィアに向ける。
ベディヴィアは弾き返された槍を受け止めると、感触を確かめるように握り返す。
「流石ですね。　王が認めたことはあります」
称賛の言葉に込められた憎しみを受け止めた私は、刃先を地面に向ける。
「やめようベディヴィア」
力無く吐き出した私の一言にベディヴィアは呆気に取られたような表情を浮かべ――小さな声で笑い始める。
「王の御前だからですか？　ふん、笑わせてくれますね。裏切り者の貴方が」
その言葉に私は肯定するかのように頷き返す。
するとベディヴィアは、面白くなさそうに鼻を鳴らすと、槍を構える。
「なら、私は王に最後の手向けとして貴方の首を差し出す。　それが騎士の務めだ」
仇討ち。
それは主を討たれた騎士にとって当たり前のことである。
なら私ができることは一つだ。

この首を差し出そう。

剣を収めた私にベディヴィアは吠える。

「なら、そのまま死ねっ！！！！」

一直線に私の心臓に向かう刺突を、私は受け入れるように眺める。

これが私にできる最後の忠義の表し方だ、と。

そんな自分を思わず笑ってしまう。

心残りと言えば、王自らの手で討たれたかった。

そう考えた私の目の前が光に包まれた。

第一話　start

風が頬を撫でる感触に思わず目を開く。

そこには青く染まった広大な大空が広がっており、その光景に思わず顔を顰めてしまう。

カムランの丘を去った際には日は既に落ちかかっていた。

だがしかし、目の前には見間違えることのない太陽が昇っており、つまり自分は何十時間も寝ていたことになる。

いや、そもそも私は本当に生きているのだろうか？

最後に見たベディヴィアの刺突は間違い無く、私自身の胸を貫いたはずだ。

が、胸元の傷どころか受けた際の左手傷すらもない。

ベディヴィアの姿などあるわけもなく、王の墓がある森の中でもない。

ただ、目の前に広がるのは荒野や草原、遥か遠くに聳え立つ見慣れない山々ぐらいだ。

身なりも城を出た時のままで、アロンダイトも腰に差さっている。

あの世か何かだろうか？

普段はそんな迷いごとを信じない私だが、その結論が一番しっくりくる。

様々な憶測を巡らせていると後方から何か近づく気配を感じ振り向いてみる。

一言でいうと悪役が似合いそうな輩だった。

黄色でそろえた頭巾に服装。

腰には安物のような剣を携えて、こちらに向かってニヤニヤと笑みを零す三人の男達である。

あの世の使いにしては盗賊のような男達だ。

軽い失望感を味わっていると、先頭に立っていた男が腰に携えた剣を抜き、こちらに剣先を向ける。

「よう、兄ちゃん。　良いモン腰にぶら下げているじゃねぇか」

ニタニタと笑う男を見て、思わず溜め息をつきそうになる。
どうやらここはあの世ではないようだ。
むしろここがあの世なら、神に祈る者たちが半減するだろう。

となると色々聞かなければならないことがある。

「少し聞きたいことがあるのだが」

「ああっ？　何勝手にほざいてやがる。　さっさとその剣を寄こしやがれ」

何なら着てる鎧も頼むぜ、そう言ってニタニタ笑う男に、再び溜め息をつくと、腰にある名剣に手を添える。

一閃。

突き出した男の剣を柄の部分くらいから斬り飛ばすと、剣の先を男に向ける。

「少し、聞きたいことが、あるのだが？」

「ふひっ！！」

立場が逆転したことに恐れをなしたのか、それともようやく私との力量の差に気付いたのか、恐れるように尻もちをつく男に対して、後ろに控えていた男二人が慌てて武器を取ろうする。

「うひっ！！」

「ぶひっ！！」

瞬時に二人に殺意を叩きこむと、先程の男同様に腰を抜かしたように、その場に座り込む。

その不甲斐なさに呆れそうになるが、腐っても騎士。

弱いものに向ける剣はない。

ようやく話を聞けると思い、私は剣を鞘に納める。

「さあ」

「へ、へい、ここは陳留という都市から二十里ほど離れたところでさ」

媚を売るような男の表情に一瞬苛立ちを感じたが、それ以上に考えることがある。

リというのは恐らく距離のことを指しているようだが、肝心のチンリュウという都市は聞いたことがない。

「コーンウォール、キャメロット、ブルターニュ……という言葉に聞き覚えは？」

「うぇ……こー？　ろ？」

「ブル…」

「キャラメル？」

男達の反応からしてもどうやら私の知るような場所ではないようだ。
案外、あの世説は当たりなのかもしれない。
となればどうする？
やはり、都市なので情報収集するべきか。

「あの……旦那……俺らはもう行っても？」

顔を強張らせたまま笑う男に、私はもう一つ聞かなければならないことがある。

「ところでお前達、盗賊か何かだろう」

再び剣に手を掛けると、男達に向けて殺気を向ける。

「ひぃ」

「旦那っ、俺らはちゃんとはなしたじゃねぇか？」

泣きつくように訴える男たちの言葉を、私は慈悲も無く切り捨てる。

「それで、お前達の罪が消えるわけでもない。　お前達が私ではなく次の人間を襲うかもしれない」

流石にそれを捨ててておくわけにはいかない。
いつの時代も、暴力というものは弱きものを傷つけるのだから。

「恨むなら私を恨め。　それを私は自身の罪とする」

ひと思いに切り捨てるのもまた慈悲か、そう考えていたが阿呆らしくて考えるのを止める。
それは加害者の傲慢だろう。

しかし私の剣が、彼らに向かって振り下ろされることはなかった。
それは、天から降りてきた介入者により阻止される。

「まてぃぃ！！」

気配と殺意に、私は後方に飛ぶと、そこに赤き槍を携えた白き天女が舞い降りた。
艶のある肌が覗く露出の高い服装に、見たこともない青い髪の美女は、不敵な笑みを浮かべると、私に向けて赤き槍を向ける。

その美しさに思わず息を呑んでしまうが、次の瞬間、言いようのない罪悪感と不甲斐なさが私の心を締め付ける。
彼女という女性に恋をしたせいで国は滅んだのに、だ。
もしこの場に最愛（グィネヴィア）がいたら、自分で首を切り落としたい気分だ。

「我が正義の槍は無法を許さぬっ！！」

吠えると同時に踏み込んだ彼女の動きに思わず、感心してしまう。
そこから放たれる刺突の矢は、ベディヴィアほどではなかったが、それでも円卓に通じるほどだ。
即座にアロンダイトを抜き去り、刺突を弾く。

「むっ！！」

「だが、まだ青い。　それでは戦場（じょうじょう）は生き抜けない」

「ふ、小癪なっ！！」

さらに速度を上げる槍捌きに、久しぶりに騎士としての高揚感が生まれた気がした。
なら私にできることはただ一つ、騎士として力を振るおう。
刺突を読み切ると、一歩踏み込むと同時に一撃を振るう。

「なっ！！」

卓越された彼女の反応により、私の一撃は易々と受け止められる。
が、受け切れなかった衝撃により遥か後方に吹き飛ばされる。

「軽いな……もう少し食事を多く取るべきでは？」

「く……女子に言う言葉ではないな」

私の挑発に、さらに笑みを濃くした彼女はさらに速度を上げた刺突を放つ。
勿論、疾いだけでない。
しっかりと体重を乗せてはなった一撃は騎士数人ですら吹き飛ばす程の威力がある。

「が、それは判断ミスだ」

槍の通る道筋は、基本過ぎた。
先程までの変幻自在の槍捌きは失われていた。
上に巻き上げるように弾くと、無手になった彼女に距離を詰める。
「チェックメイトだ」
剣を首筋に当てて、勝利に浸る。
間違い無く、彼女は強敵だ。
彼女に勝てる円卓の騎士は、自分を含めて数人程だろう。
「く、殺すがよい」
辱めは受けぬ。
そう目で訴えかける彼女に、思わず敬意を抱いた。
彼女は間違いなく私より優秀な騎士だ。
「疾さ、重さ共に中々なものだ。　槍捌きも驚嘆に値する。　が両立ができていない」
それができれば、今度は死力を尽くして戦わなければならないだろう。
彼女なら数年でできそうだが…
良い素質を持ったものを見て感動している私を、彼女は不審そうに視線を送る
「む、何の話だ？」
「貴方のこれからの課題だ……えっと」

「趙子龍だ」

思わず名前を聞くことを忘れていた私は、彼女から名前を教えられると、その名を記憶の中に刻みこんだ。

「それができれば貴方はまた強くなる、チョーシリュー」

「何か私の名前を呼ばれている気がしないのですが……」

私の発音が気に入らなかったのか、眉を顰めるチョーシリューに対して、苦笑いで誤魔化す。

私自身思っていたことである。

「……努力しよう。　っしまった……女性に先に名乗らせてしまったな。　私の名はランスロットだ」

彼女だけに名乗らせていたことに気付き、私も名前を名乗る。

少し前までは湖の騎士や円卓の騎士を名乗っていたが、今の私には両方相応しくない。

「らんすっ？」

「呼びやすいように略しても構わない。　昔、ランスと呼ばれたことがある」

やはり彼女には私の名前は言いにくかったようだ。

アグラヴェインやアグロヴァルなどとは違い、言いやすいと思っていたのだが……

私の提案に彼女はほっとしたような笑みを浮かべて頷く。

「なら、らんす殿で」

「なら私はミス・チョーと呼んでもいいかな？」

「私の名前の原形が薄れている気がするのですが……」

彼女に指摘通り、確かにそうかもしれない。

「ではミス・シリューのほうがいいかな？」

「それが一番マシですね。　あとミスを退けていただければ」

「ではシリュー、そう呼ばせてもらおう」

「うむ」

満足そうに頷くシリューに笑みを返しながら、私はアロンダイトを投擲する。

「ひぃっ！！」

「逃げるなよ、盗賊諸君」

私とシリューが話し込んでいる間に逃げようとしていた男達の足元にアロンダイトは突き刺さった。

「ふむ、盗賊は彼らの方ですか」

「シリュー、貴方は確か私を疑っていたはずでは？」

「ぬぅ……そのようなこと貴方の剣筋を見れば解ることです」

「それに対し、貴方は少し真っすぐすぎる」

正義の槍とシリュー自身そう言っていたが、確かにそのような気がした。

彼女自身の性格も真っすぐなのだろう。

しかし今はシリューの話より先にすべきことがある。

私が一歩踏み出すと、男達は先程と同様に腰を抜かして震え始めた。流石にそこまで怯えられると、呆れを通り越して憐れに思え、慈悲の一つも与えたくなる。

後ろにいるシリューという女性の目の前で人を殺めるのもどうかと思う。

「おい、お前達、名前は？」

「か、韓忠です」

「そそそ、孫、仲です旦那」

「きききょ、？、都だな」

「……そうか、ならお前達はこれからはカン、ソン、キョウ、と名乗れ」

私がそういうと男達は呆気に取られたようにこちらを見る。
するといち早く反応できたリーダーだった男ーカンは詰め寄るように口を開く。

「だ、旦那っ！　それは名前を変えろということですかいっ！！」

「ああ、そうだ。　カンチューという輩は私がここで斬り捨てた」

それが私にできる唯一の慈悲である。
だが、それを聞いたシリューは不満げに眉を顰める。
無法者を野放しにすることは、彼女の正義にとって許されないことだろう。

「生まれ変わったお前達には、私が立派な騎士になれるように騎士道を叩きこんでやろう」

これは決定事項だ、とカン達に言ってやると、彼等は絶望を背負ったかのように項垂れたのだった。

私とシリュー、そしてカン達が出会ったこの時、私の最後の物語が始まったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0966ba/

円卓無双

2012年1月3日01時50分発行